

テーマ：いろいろないろ

署名	著者	出版社	請求記号	内容
黄金りゅうと天女	代田 昇／文 赤羽 末吉／絵	BL出版	Eホン/A	慶留間の島にうつり住んだはたらきものの若夫婦が女の子をさずかった。島のしゅうは可愛とよんでだいじにしていた。ところが7つになった可愛が「天にいかねば」とオタキ山にのぼり、むかえにきた黄金色の竜の背にのってきえてしまう。数年後、とつぜん大和のかいぞくせんが上陸し、島をおそった。その時、空から黄金竜があらわれ…。
ホーホー！きれいだな ーミミズクのいろのえほんー	ティム・ホプグッド／作・絵 たが きょうこ／訳	徳間書店	Eホン/ホ	ひるまってどうなっているか知りたくて、ミミズクのこは、あさめをさしました。そらはやさしいピンクいろ。あさもやのむこうからおひさまの、きいろいひかりがさしてきます。そらにはしろいくもがうかんでいたり、はっぱはきれいなみどりいろです。ひるまのきれいないろをみてミミズクのこはうれしくなりました。
ふーってして	松田 奈那子／著	角川書店	Eホン/M	きいろのいろみずがぼとり、とおちました。ふーっと息を吹きかけるといようができました。つぎはみどりのいろみずにふーってしてみましよう。こんどはくさのびました！いろいろなものにふーってしてみましよう。はりねずみにねこに犬、おにいさんおねえさんおじいちゃんにも。みんなにふーっ！つぎはなにがどうなるかな？
じぶんだけのいろ	レオ・レオニ／著 谷川 俊太郎／訳	好学社	Eホン/L	カメレオンはレモンのうえでは黄色に、とらのうえではしまもように、その場に合せて色を変えることができます。でも、カメレオンはずっと灰色のぞうや桃色のぶたのように同じ色でいたかったのです。もし、はっぱのうえでくらしたら？ずっと緑色でいられるかもしれないと思いつきました。
花の色のふしぎ	佐藤 有恒／著	あかね書房	471	みなさんは何色の花がすきですか？日本では四季を通じてさまざまな花を見ることが出来ます。一番多い花の色は、野外の花でみると黄色と白色で全体の6割、次が赤やピンクで2割くらい、その後に紫色と続きます。花の色がどのようなしくみでその色に見えるのか、また虫にはどんな風に見えるのか、ひみつをさぐってみましよう。
土の色って、どんな色？	栗田 宏一／著	福音館書店	613	みんな土ってどんな色だと思いますか。やっぱり茶色？でも、土ってよく見てみると一色だけじゃないんです。ちょっと赤っぽかったり、黄色っぽかったり、みどりっぽかったり…いろいろな色があるみたい。ほかにはどんな色があるんでしょうか。日本中の土の色をいっしょに見てみましよう！おうちのまわりの土はどんな色かな。

署名	著者	出版社	請求記号	内容
色で見つける名画の秘密	ロージー・ディキンズ／文 ロンドン ナショナル・ギャラリー／監修	あかね書房	724	人間は大昔から絵を描いてきました。現在残る世界最古とされる絵画は、今から数万年前に洞くつに描かれました。今わたしたちは、たくさんの絵の具の中から好きな色を選ぶことができますが、きれいな「色」を作るといことはとても大変なことでした。絵の具はどうやって生まれたのか。その歴史をたどってみましょう。
しろいいぬ？くろいいぬ？	マリオン・ベルデン・クック／ぶん 池田 龍雄／え 光吉 夏弥／やく	大日本図書	9-0/クツ	ワググルズは、なんでもくわえるのが好きな白い犬です。ある日、デパートにまよいこみ、うりばのぼうしをくわえたので、さあたいへん！「どろぼう！」と追いかけれ、びっくりしたワググルズはぼうしをほうりだしてにげだしました。ところが、せきたんの中にとびこんで真っ黒になっても、しゅえいさんは追いかけてきます。
オレンジ色の不思議	斉藤 洋／作 森田 みちよ／絵	静山社	9-0/サイ	ある冬の日暮れに、わたしは不思議な少女と出会う。何気なく月と金星を見ているつもりだったわたしに、「火星も見えていたでしょ」と少女は言う。火星の場所を知らないわたしに、月と金星のあいだに見えるオレンジ色の小さな点が火星であることを教え、「言われないと見えないものって、あるよね。」と言う。少しこわくて不思議なお話7編。
ももいろのきりん	中川 李枝子／さく 中川 宗弥／え	福音館書店	9-0/ナカ	るるこはおかあさんから、とても大きいももいろのかみをもらい、せかいいちくびのながいきりんをつくりました。「キリカ」と名前をつけ、ふたりはなかよしになります。あるひ、キリカのかみくびが雨にぬれて、きれいなももいろがはげてしまいます。キリカのかみくびをなおすために、るるこはキリカのせなかにのり、クレヨン山にむかいます。
色どろぼうをさがして	エヴァ・ジョセフコヴィッチ／作 大作 道子／訳	ポプラ社	933/シヨ	12歳のイジーのママは、ある事故で昏睡状態になっている。イジーはその原因が自分にあると思ひこみ、現実から目を背けている。やがて、親友のルーとの関係がぎくしゃくし、ママが描いてくれた大切な壁画から色をぬすまれてしまう。しかし、トビーやトンガリ、フランクとの新たな出会いで、自分の心に向き合い真実を知ろうとする。
黒いバイオリン	ウルフ・スタルク／作 アンナ・ヘグルンド／絵 菱木 晃子／訳	あすなろ書房	949/スタ	妹のサーラは病気で寝たきりだ。サーラのためにぼくは下手くそなバイオリンを弾いていた。するといつの間にか目の前に死神が佇んでいた。死神の前で、ぼくはサーラとの思い出、悲しみ、さびしさ、喜び、そして命への愛をバイオリンにのせて一晩中弾き続けた。夜が明けるころ、死神はまだぼくたちの前にいるのだろうか。